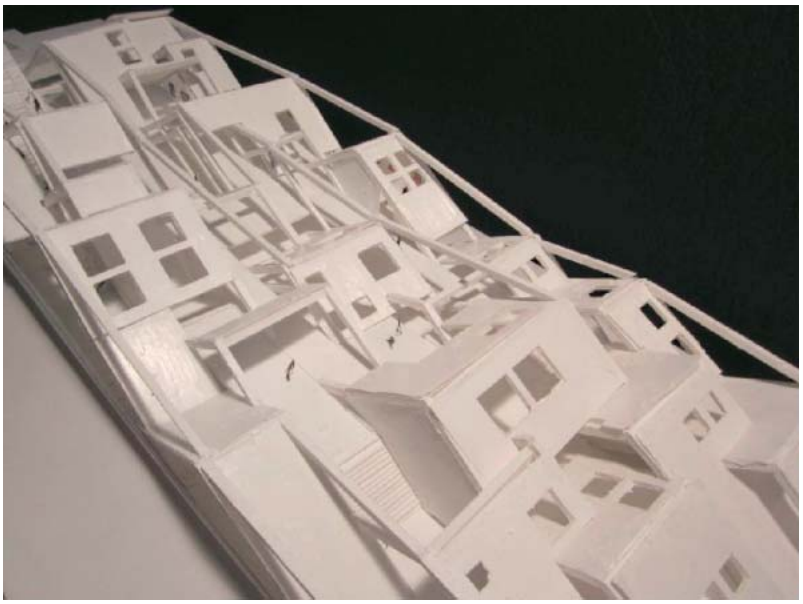
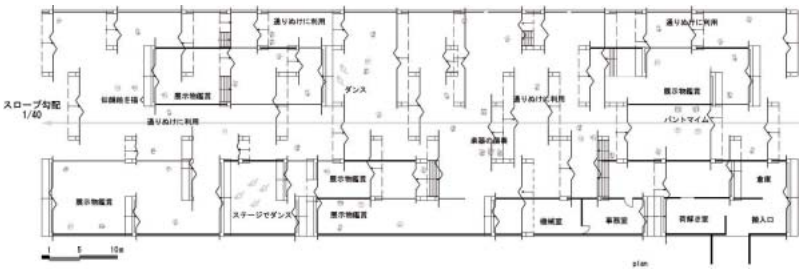
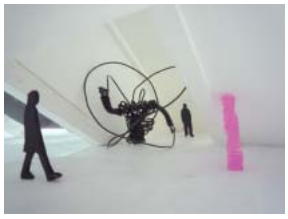
奨励賞

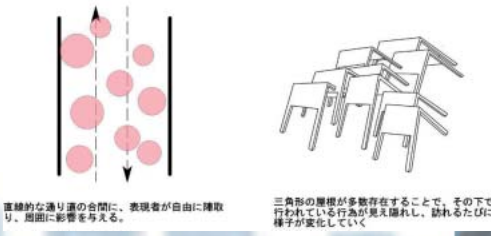
アートシークエンス

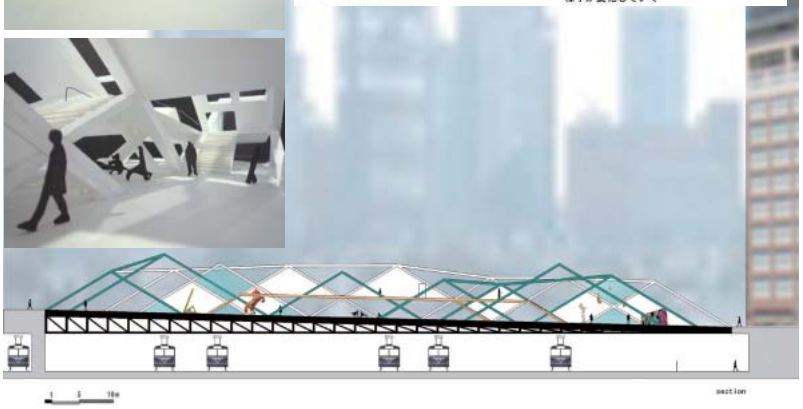
安藤　司（あんどう　つかさ）
東京電機大学　情報環境学部　情報環境学科









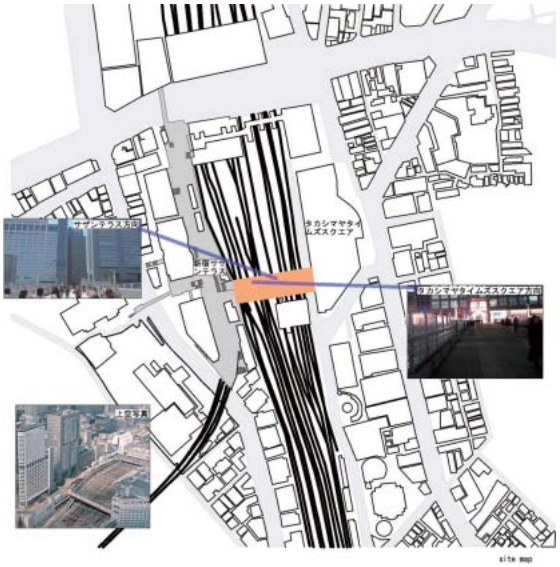


スポットとして人が集まる美術館と、突然の出会いで立ち止まる路上パフォーマンス。鑑賞のきっかけは違うが、芸術の一部である。

この二つを掛け合わせることで、芸術鑑賞に対する新たな出会い、感性を生み出す。

計画地は、新宿駅南口前にある大型施設から伸びる連絡橋。目的地に向かうためのただの通り道であり、都市の隙間とも言えるその場所だからこそ、街の日常が芸術で繋がる。

本計画の三角形の屋根の下では、表現者によって様々なことが起こる。通るたびに表情を変え、日常の中にそれがあることによって歩くことが楽しくなる。ふとした時間に足を止めれば、美術との出会いもより自然になり、それが当たり前のものになる。



講評　都心には珍しいほど、ぽっかりと青空が広がっている長い横断橋を、人々はただ通り過ぎていく。ここはもっと価値ある都市空間にできるだろうとの着想。人とアートが出会う仕掛けとして、歩くにつれ作品展示やパフォーマーの活動を楽しむのに手ごろな空間が次々と現れるように、三角ユニットを連続させている。斜め壁に沿ってブリッジに上る時には、周辺ビルの窓を投影したかのような開口部に切り取られた空が面白く変化する。両岸の高層ビルからはアートが見え隠れするだろう…。

そうしたアイデアは新鮮であり、今後も都市を魅力的にするまなざしを持ち続けて欲しい。橋の上の仕掛けに留まらず、橋の構造も含めたデザインにまで発展していけば、さらに迫力を増す提案になるにちがいない。

（審査員：柳瀬 寛夫）